

新約聖書の中の奥義 第 18 回

□ 第五部「サタンの 2 つの奥義 と それを打ち破る神の 8 番目の奥義」アウトライン

- A) サタンの奥義の第一 バビロンの奥義 黙 17 : 1～18
 B) サタンの奥義の第二 不法と不法の人の奥義 II テサ 2 : 1～12
 C) 神の 8 番目の奥義 サタンの奥義を打ち破ること
 D) 総括：終わった

→ 本日は、17 章
9～18 節を学ぶ

□ 前回までの内容

黙示録 17 章の位置づけは・・・

	区分			黙示録の箇所
①	大患難期の前に天で起きる事			4～5 章
②	大患難期	7 年間の全体の流れ	前半期	6～9 章
③			中間で起きる事	10～14 章
④			後半期	15～16 章
⑤		7 年間の中で特に重要な	バビロンの二つの役割	17～18 章
⑥		ことをクローズアップ	メシアの再臨	19：1～19
⑦	大患難期終了後に起きる事（王国の準備期間）			19：20～21 20：1～5
⑧	メシアの王国【千年間】			20：6
⑨	メシアの王国の後の出来事			20：7～15
⑩	永遠の秩序【新しい天と新しい地】			21 章～22：5

黙示録 17 章 1～8 節では・・・

1. バビロンの二つの役割、その第一は、世界統一宗教の本部所在地である。大患難期の前半期において、バビロンは宗教面で世界を支配する。政治権力もバビロンを支持する。大患難期に入る時点で世界の政治権力を握っているのは、10 人の王たち。
2. 大患難期の中間で、10 の王たちに対し、「獣＝反キリスト」が挑戦する。8 節で反キリストは「いたが、いない、やがて来る」、すなわち「一度死ぬが、よみがえる」と預言されている。反キリストは 10 人の王たちとの戦いの中で戦死するが、よみがえって 3 人の王を倒し、世界の支配権を握るであろう。

サタンの奥義の第一 バビロンの奥義 黙 17:1~18 ②

3. 獣と反キリスト 9~14 節

(1) 七つの頭 9~11 節 ここに知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずです。また、昔いたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

- ① 「獣」・・・世界的な覇権国家を象徴する。七つの頭と十本の角を持つ獣は、ダニエルが預言した第四の獣である。
- ② この獣には頭が七つ、角が十本ある。
- 「頭」・・・指導者、王、王位、王家を象徴する
 - 「角」・・・力ある者、指導者、王を象徴する
 - 9 節では、「七つの頭とは、七人の王たちのことです」と説明されている。
 - 12 節では、「十本の角とは十人の王たちです」と説明されている。
- ③ 前後の文脈や旧約預言との関係から見ると、
- 七つの頭は、個人的な王ではなく、第四の国の統治システムが歴史的にたどる七つの統治形態を指す。
 - 他方、十本の角は、個人的な王を指し、大患難期に入る時点で世界を分割統治する 10 人の王たちを指す。
- ④ 第四の国の統治形態の変遷は次のとおり。最終的に第七段階は反キリストによる世界支配に至る。この表の内容は、直接的に聖書箇所からの裏付けはないが、歴史から推測されるものである。「ここに知恵のある考え方が必要です」(9 節)

七つの頭	統治形態	歴史的時期
第一の頭	王政	紀元前 753 年～510 年
第二の頭	貴族政（元老院・執政官）	紀元前 510 年～494 年
第三の頭	護民官と独裁官	紀元前 494 年～390 年
第四の頭	共和政・十人委員会	紀元前 390 年～59 年
第五の頭	寡頭政	紀元前 59 年～27 年
第六の頭	帝政 ⇒ 現代国際社会に至り、十人の王たちによる世界統治機構まで続く	紀元前 27 年～ 大患難期の前半
第七の頭	反キリストによる世界支配	大患難期の後半（3 年半）

⑤ 11 節 昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

- 昔はいたが今はいないあの獣＝反キリスト（下線部は、原文には「昔」「今」なし、「いたが、いない、来るであろう」＝「死んでよみがえる」という意味である）
- 八番目の王：反キリストは、10 人の王たちのうちの 3 人と戦う。一度は戦死するが、よみがえって 3 人の王を倒す。残りの王は 7 人、反キリストは 8 番目の王として立つ。
- 七人のうちの一人：七つの頭のうちの、第七の頭である（④の表「第七の頭」）
- 滅びることになります：反キリストは、大患難期の末期、メシアが地上に再臨するときに、メシアの息によって殺される（Ⅱテサ 2:8）。その後、復活させられて捕えられ、「生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれる」（黙 19:20）

(2) 十本の角 12～13 節 あなたが見た十本の角は十人の王たちです。彼らはまだ王権を受けていませんが、獣とともに、一時だけ王としての権威を受けます。これらの王たちは一つ思いとなり、自分たちの力と権威をその獣に委ねます。

- ① あなたが見た十本の角は十人の王たち：大患難期に入る時点では、世界は 10 の地域に分割され、それぞれに王が立ち、全部で 10 人の王たちが分割統治する。
- ② 大患難期の間期において、大事件が起きる。反キリストが 10 人の王たちに戦いを挑み、世界的規模での戦争が勃発するのである。
 - ダニエル 11:45 の預言によると、特に 3 人の王たち（南のエジプト、北のシリア、東のメソポタミア）との戦いが激しくなる。
 - そのとき、反キリストの本営は、「海（複数形）の間」、すなわち地中海と死海との間、「聖なる美しい山に」＝エルサレムの神殿の丘の上に、置かれる。
 - この戦いの中で、反キリストは戦死する（ダニ 11:45）。
 - 戦死した反キリストがよみがえる（黙 13:3）
 - 反キリストは 3 人の王たちを倒す（ダニ 7:24）
- ③ 彼らはまだ王権を受けていません
 - この王権は、「第七の頭」における王権、すなわち反キリストを「王の王、主の主」とし、そのもとに 7 人の王たちが従って世界を支配するという王権である。

④ 獣とともに、一時だけ王としての権威を受けます。これらの王たちは一つ思いとなり、自分たちの力と権威をその獣に委ねます

- 「これらの王たち」・・・10 人の王たち、ただし内 3 人の王は反キリストによって倒され、王位は空席になっている。
- 「自分たちの力と権威」・・・大患難期の前半では、10 人の王たちは、「第六の頭」における王権を持っていた。それが「自分たちの力と権威」である。10 人のうち生き残った 7 人は、10 の地域の王権を反キリストに差し出し、反キリストに服従する。反キリストは、7 人を失脚させずに、逆に重く用いる。ダニエルは次のように預言している。「**彼（反キリスト）は異国の神の助けによって城壁のある砦を取り、彼が認める者には榮譽を増し加え、多くのものを治めさせて、代価として国土を分け与える**」（ダニ 11：39）
- 「獣とともに一時だけ王としての権威を受けます」・・・大患難期の後半（3 年半）において、獣＝反キリストと 10 の地域の王たち（7 人）が、王としての権威を受ける。その期間は、「一時だけ」、すなわち限定されている。ダニエルは次のように預言している。「**それは、ひと時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する**」（ダニ 12：7）。聖なる民とはイスラエル民族である。大患難期の後半は、反キリストが世界を支配し、ユダヤ人を根絶やしにしようとする時期である。その中でユダヤ人の多くがボツラ（ペトラ）に避難して 1260 日、3 年半を過ごす。その間に、これまでイエスをメシアとして認めてこなかったイスラエル民族の頑なさ（これが、「聖なる民の力」である）が打ち砕かれ、民族的な悔い改め、そして民族的な救いへと導かれる。「**こうして、イスラエルはみな救われるのです**」（ロマ 11：26）。

(3) 子羊との戦い 14 節 彼らは 子羊に戦いを挑みますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。子羊は主の主、王の王だからです。子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです。

- ① 彼らは：反キリストと七人の王たち
- ② 子羊に戦いを挑みますが、子羊は彼らに打ち勝ちます：ハルマゲドンの戦いを指す。この戦いに勝利するのは、メシアである。
- ③ 子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです：メシアとともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たち、すなわち教会の聖徒たちである（参照、ユダ 14、I テサ 3：13）
- ④ 11 節は反キリストが「滅びることになります」と結んでいた。この 14 節でも、メシアが反キリストに打ち勝つと預言されている。

4. 中間期においてバビロンは、第二の役割、**反キリストによる世界統治の首都**へと移行する 17:15~18

- (1) 「大水」(17:1) の解釈 17:15 また、御使いは私に言った。「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。

- ① 17:1 で、淫婦は、大水の上に座していた。
- ② 17:5 では、天使が使徒ヨハネに「大水」(原文直訳は、多くの水)の意味を教える。
- ③ 大水=世界中のもろもろの民族、人々。
- ④ バビロンという都市には、大患難期前半では、世界統一宗教の本部が置かれる。これは霊的な姦淫、すなわち偶像崇拜を行う偽の宗教組織である。そして、人々に仕えるのではなく、人々、それも全世界の人々を支配する宗教組織である。

- (2) 世界統一宗教の本部としてのバビロンが倒される 17:16~17 あなたが見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになります。それは、神のことが成る時まで、神はみこころが実現するように王たちのところを動かし、彼らが一つ思いとなって、自分たちの支配権を獣に委ねるようになされたからです。

- ① 「十本の角」・・・世界統治機構の 10 人の王たちを指す。中間期においては、そのうちの 3 人が反キリストによって倒され、残った 7 人の王たちは反キリストに服従するようになる。
- ② 「獣」=反キリスト。世界統治機構のトップに立つ。自らを神と称し、人々に自分を拝ませようとする。バビロンの世界統一宗教は、邪魔になるので、これを憎み、財産を没収し、僧侶たちを追放し、礼拝施設を焼く。
- ③ 7 人の王たちが一致して自分たちの支配権を反キリストに委ねるようにしたことは、彼らは認識していないが、神のみこころを実現するものである。
 - 7 人の王たちが、バビロンにあった世界統一宗教を破壊した結果、バビロンは反キリストの支配下になり、反キリストはここを世界統治の首都とする。
 - こうしてバビロンは、二番目のサタンの奥義である「不法の人=反キリスト」のための舞台になる。
 - 同時に、サタンの二つの奥義を打ち破る神の 8 番目の奥義が、大患難期の後半において、動き出す。その主要な標的は、反キリストの世界統治の首都となったバビロンである。

- (3) バビロンは、反キリストの世界統治のための首都となる 17 : 18 **あなたが見たあの女は、地の王たちを支配する大きな都のことです。**

- ① 使徒ヨハネが見た女は、大きな都バビロンを象徴している。
- ② 大患難期の前半では、世界統一宗教の本部が置かれ、全世界の人々の宗教生活を支配した。そして、その偽の宗教組織は、真の信者の多くを迫害して死に至らしめた。
- ③ 大患難期の後半では、反キリストの世界統治のための首都となる。「地の王たちを支配する」大きな都となる。政治・経済・軍事・宗教すべての中心地となる。

- (4) 黙示録 18 章・・・大患難期の末期、ハルマゲドンの戦いの中で、バビロンが破壊される。

- ① 旧約聖書の預言
 - 反キリストの首都バビロンが攻撃される（イザヤ 13 : 1～14 : 23、エレミヤ 50～51 章）
 - そのとき、バビロンは世界経済の中心地となっている（ゼカリヤ 5 : 5～11）
 - 攻撃するのは、大患難期において信者となった異邦人信者たち（イザヤ 13 : 3「わたしに聖別された者たちに命じ、またわが怒りを晴らす勇士たち、わが威光に歓喜する者たちを呼び集めた」）
- ② 黙示録 18 章の内容
 - 1～3 節 バビロンは廃墟となり、そこには千年王国の間も悪霊が住むようになる（これも、まず最後のシーンを見せるパターン。旧約預言の確認＝イザヤ 13 : 20～22、14 : 22～23、エレ 50 : 39、51 : 37、43）
 - 4～8 節 バビロンが攻撃される前に、「わたしの民＝ユダヤ人たち」にバビロンからの避難を勧告
 - 9～19 節 バビロンの崩壊を嘆く人々（王たち、商人たち、海運業者たち）
 - 20 節 バビロンの滅亡を喜ぶ人々（天にいる聖徒たち、使徒たち、預言者たち）
 - 21～24 節 （あらためて結論）バビロンは完全に滅亡するという預言（旧約預言の確認＝エレ 51 : 61～64）